

児童家庭支援センターによるヤングケアラー支援の実施および検証事業総括：福井

あわら児童家庭支援センター

母親一人で生計を立て仕事の疲労も大きく、家庭料理を食べる機会の少ない児童が手作り料理の楽しみや喜びを体験し、楽しい会食の時間を持ち、食への関心を高め、自分でも家庭で料理をする意欲や料理をする力を育むことを活動の目的とした。

料理本には料理時間15分と書かれたメニューでも、実際には1.5時間から2時間かかる時もあったが、一生懸命真面目に料理に向き合ってきた。キッチンでは食材と出会い、包丁で切り、フライパンやオーブン、鍋を使い、料理過程を楽しみながら覚えてきた。美味しい料理を自分の手で作り完成させ、完成させた料理を頂く体験から達成感や喜びなどのポジティブな情緒が生まれ、児童の人格に誇りと自信をもたらし、自尊心を高めることに繋がる尊い体験となった。完成した料理は、家族へのお土産として持って帰りたいという家族愛も強く、家族全体が食事面での潤いと活力を得て元気になる機会になった。料理過程で出会った困難や失敗は柔軟に物事を考え工夫をし、めげずに乗り越える力を育み、気持ちや精神面で逞しく成長している。クッキング中には会話も弾み、他人と出会い楽しいコミュニケーションになるよう心掛けてきた。一人ひとりが自分自身の思いやペースを尊重され活動できることを基本に、姉妹で協力と競争をし切磋琢磨し料理の腕を身に付けてきた。本児の日常生活での楽しい出来事や悩み、趣味、家族の話を聴き、生活での喜びも悲しみも怒りも共に味わい、勇気づけをし、対話を重ねてきたことは児童が社会の中で他者と関わり生きていく力に繋がると思う。

母親はこの活動を肯定的に受け止め、電話や家庭訪問時には必ず応答し、子ども達に活動への参加の声掛けをし、電話で子ども達と直接、スタッフが話せるよう配慮され、母親とも良好な関係を築いてきた。母親には毎日食事の用意ができない心配はあるが、母親の手料理を食べる日も増え、本児も簡単な電子レンジでの料理だけでなく、フライパンや鍋を使った本格的な家庭料理や姉のお弁当を作り、自分で料理を作る力を身に付けるまでに成長している。

おくえつ児童家庭支援センターめぐみ

児童家庭支援センターは民間の機関であり、市役所や学校からの紹介でご家庭に関わらせていただくことは多いが、強制的に介入することはできない。相談支援職員の力不足で信頼関係の構築が困難、また、周囲への不信感等で孤立しがちなご家庭であった等ということもあるかもしれないが、どのように関係を構築していくかということは、常に頭を悩ませる問題である。

事業では、食品や日用品を届けることが、定期的にご本人やご家族と顔を合わせることに繋がり、結果としてそれまで出て来なかった相談や困りごとをお聞きすることができた。支援対象のご家庭と新たな関係を構築できたことは、相談支援職員にとって、とても

有り難いことである。

今回、食料品や日用品を届けるという関わりをしたことで、それまで関係構築が難しかったご家庭から困りごとを相談されたり、新たなサービスの提供につながったりするという経験ができた。

また、「甘えてはいけない」「自分が頑張らなければならない」という考えが強く、支援を拒否しがちなご家族であっても、長期に渡って定期的に顔を合わせていくことで、警戒感や不信感を軽減することが出来たように感じる。

児童家庭支援センター一陽

2年間にわたるヤングケアラー支援研究を通して、私たちは多くの気づきを得た。

とりわけ社会的養護を主な活動領域としてきたソーシャルワーカーは、虐待スキーム（加害/被害関係）で家族関係を捉え、加害者を責め被害者を救済するといった対応をしがちであるが、ヤングケアラー支援では、そのような対応は功を奏せず、むしろ家族全体が抱えている心配事に寄り添い、ともに解決していこうとする姿勢こそがソーシャルワーカーに求められているということを実感できた。

またアウトリーチの際に、お裾分けなどと言ってレトルト食品や生理用品、日用雑貨等を持参するなど肩肘の張らない、いわゆる“ゆるい”支援がとても効果的であることも判った。

さらには、主担当となったソーシャルワーカーだけが躍起になってヤングケアラーやその家族との関係づくりに奮闘するのではなく、その周りにはいる多くの支援者（学校関係者やこども食堂のスタッフ、民生児童委員等）との連携・協働によって幅広に支援を展開していこうと構えることも有用であった。

なお現在、越前市は、市内に大工場が複数立地している関係で外国籍住民が人口の約5%を占めるに至っている。児童虐待や貧困、ヤングケアラー事案も多数報告されており、外国にルーツをもつ子どもたちへの支援を如何に展開していくかが喫緊の課題となっている。2年間にわたるヤングケアラー支援のノウハウや知見をフルに活かしながら、外国籍児童やその家庭への支援を実践していきたい。